

看護婦の生命観に関する調査報告 ——看護婦と看護学生の比較検討——

川崎医療短期大学 第一看護科

初鹿真由美 杉田 明子 渡邊ふみ子 酒井 恒美

(平成2年8月27日受理)

A Comparative Investigation on Nurses' and Student Nurses' Outlook on Life

Mayumi HATSUSHIKA, Akiko SUGITA,
Fumiko WATANABE and Tsunemi SAKAI

*Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki, Okayama 701-01, Japan*

(Received on Aug. 27, 1990)

Key words : 生命観, 看護婦, 看護学生

概 要

看護婦を対象に、生命観に関する調査を行った。そして、前報の看護学生の場合と比較検討をした結果、看護婦も看護学生も自分の場合には癌を告げてほしいが、一般・家族の場合には告げることを躊躇していた。末期癌の治療では、いずれの場合も、苦痛の緩和を第一としていた。植物状態の患者の治療・看護では、看護婦と看護学生は、自分の場合には自然に任せたいとする率が高率で、同傾向を示した。しかし、一般・家族の場合には異なった傾向を示した。脳死と臓器移植では、7割が肯定的な反応を示した。

I はじめに

死を目前にした人々への看護には、磨き抜かれた看護技術が必要であり、さらに高度な人間的な判断や配慮が求められる。そこには、看護に当たる者の生命観が重要なかわりをもつと思われる。

今回、川崎医科大学附属病院の看護婦551名を対象に生命観に対する調査を行い、その実態を明らかにするとともに、前報¹⁾の本学看護学生の場合と比較検討したので、その結果を報告する。

II 研究方法

1. 調査対象

川崎医科大学附属病院看護婦551名

2. 調査時期

1989年7月

3. 調査方法

質問紙を作成し、「癌を告げる」「末期癌の治療」「植物状態になった患者の治療・看護」「脳死と臓器移植」の4項目について調査した。各設問内容は前報¹⁾と同一であり、各設問毎に一般の場合(以下〔一般〕)、自分の場合(以下〔自分〕)、家族の場合(以下〔家族〕)の賛否を、賛成、どちらともいえない、否定の3段階で回答を求めた。回答者は518名で、回収率は94.0%であった。

4. 調査結果の分析

看護学生との比較は、看護婦の経験年数によって、5年未満(以下N1)357名、5年以上(以下N2)161名に分類し、検討した。

比率の差の検定には、Fisherの直接確率計算法を用いた。検定における有意水準は5%とした。

III 結 果

1. 癌を告げる

癌を告げることに賛成であると肯定的反応をした者が、〔一般〕26.6%・〔自分〕68.2%・〔家族〕13.2%であった。これに対して、告げることに反対であると否定的反応をした者は、〔一般〕22.7%・〔自分〕19.2%・〔家族〕57.5%であった(図1)。

看護婦の経験年数を5年未満と5年以上に分け、前報¹⁾の看護学生と比較して肯定的反応をした者の率及び、否定的反応をした者の率をみたのが図2である。ただし、図には3群間に有意差が認められなかったものは省略した。

次に、〔自分〕は知りたいたと答えた68.2%の者が、〔一般〕及び〔家族〕にはどのように考えているかをみると、告げると答えた者が〔一般〕35.9%・〔家族〕17.4%にとどまっている。この率を看護学生(〔一般〕45.9%・〔家族〕27.0%)と比較すると、〔家族〕において看護婦が有意に低率であった。

2. 末期癌の治療

多少の苦痛は我慢してでも治療を続けたいとする者、〔一般〕4.3%・〔自分〕5.1%・〔家族〕4.5%と、どの場合も低率であった。それに対して、苦痛の緩和を優先するとした者は、〔一般〕88.9%・〔自分〕88.9%・〔家族〕91.4%と、いずれの場合にも非常に高率であった(図3)。看護学生との比

較は、図4である。

次に、自分が当事者であったなら苦痛の緩和を優先してほしいと回答した88.9%の者のうち、〔一般〕及び〔家族〕にはどのように考えているかをみると、積極的に治療を続けるとした者が、〔一般〕・〔家族〕共に2.6%であり、この率は、看護学生(〔一般〕2.7%・〔家族〕4.8%)と比較して有意差は認められなかった。

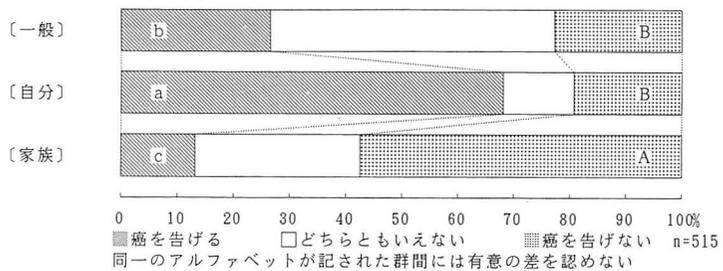


図1 癌を告げることに對する賛否

— 一般と自分と家族に對する場合の比較 —

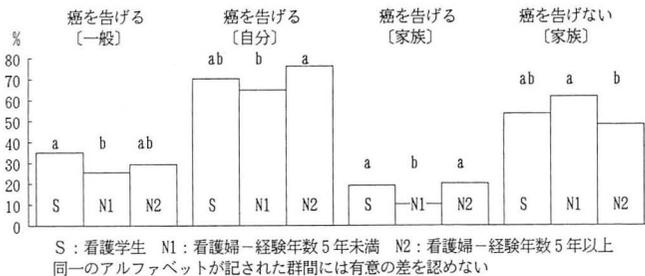


図2 癌を告げることに對する賛否 — 看護婦と看護學生の比較 —

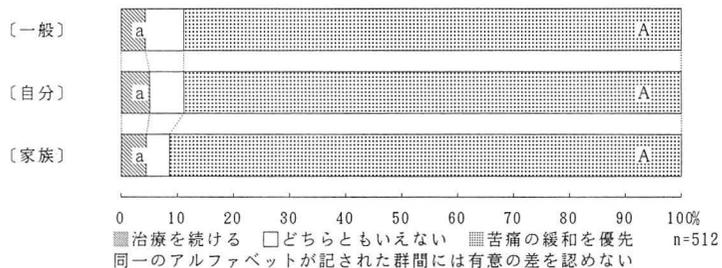


図3 末期癌治療の是非 — 一般と自分と家族に對する場合の比較 —

3. 植物状態になった患者の治療・看護

人工呼吸器等は外さないで、治療を続けて現在の状態をできるだけ維持したいと望む者が、〔一般〕20.7%・〔自分〕3.5%・〔家族〕22.7%であった。これに対して、むしろ自然に任せたいとした者は、〔一般〕47.8%・〔自分〕86.2%・〔家族〕63.4%である(図5)。この率を看護学生と比較すると(図6),治療を続けるとした者は看護学生が、〔一般〕・〔家族〕共に有意に高率であった。また、自然に任せるとした者は、〔一般〕でN2が有意に高率であり、〔家族〕は看護学生が有意に低率であった。

次に、〔自分〕は自然に任せたいとした86.2%のうち、〔一般〕及び〔家族〕にはどのように考えているかをみると、治療を続けるとした者が、〔一般〕16.0%・〔家族〕16.4%であった。この率を看護学生(〔一般〕28.9%・〔家族〕34.9%)と比較すると、〔一般〕・〔家族〕共に看護婦が有意に低率であった。

4. 脳死と臓器移植

〔一般〕では、脳死を死と認めることに賛成した者63.5%、反対した者9.0%である(図7-①)。看護学生と比較すると、脳死を死と認めることに賛成した者が、図8のよ

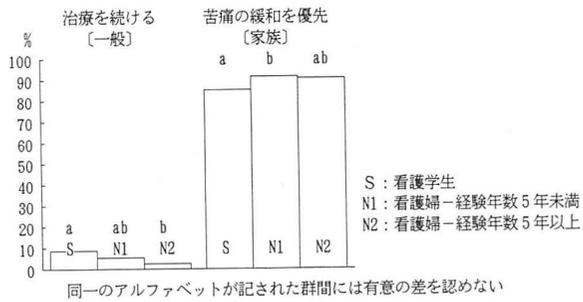


図4 末期治療の是非 — 看護婦と看護学生の比較 —

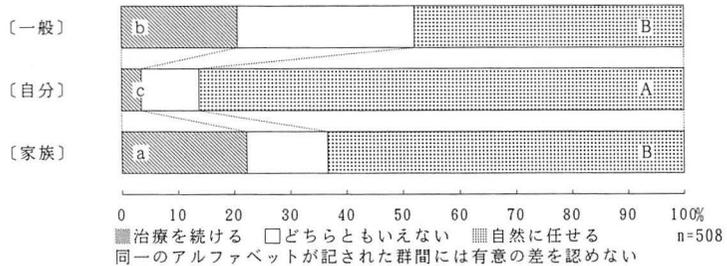


図5 植物状態の患者の治療・看護の是非

— 一般と自分と家族に対する場合の比較 —

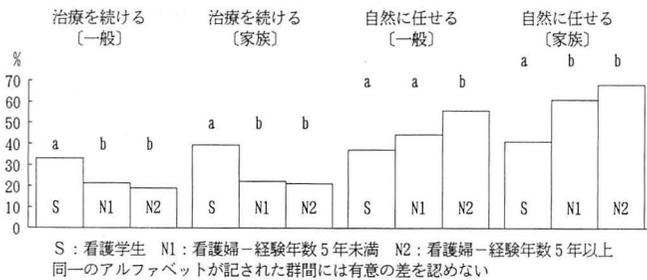


図6 植物状態の患者の治療・看護の是非 — 看護婦と看護学生の比較 —

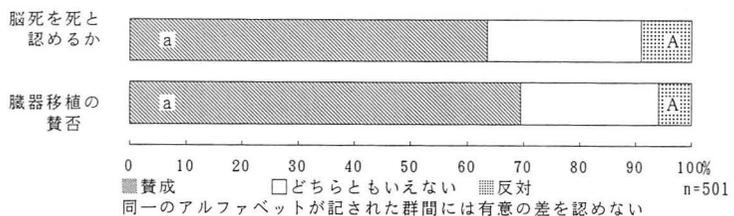


図7-① 脳死を死と認めるか否かと臓器移植の賛否 — 一般の場合 —

うに看護学生67.6%・N1 65.6%・N2 58.6%であり、有意差は認められないが、N2は低い傾向にあった。

また、臓器移植に対して賛成した者は69.5%、反対した者は5.8%で（図7—①）、この率を看護学生と比較すると、図9のようにN2が反対した率が有意に高い。

脳死を死と認めるか否かと臓器移植の賛否の内訳（図7—②）をみると、脳死を死と認めることに賛成した者のうち、82.4%が臓器移植に賛成しているが、3.1%は反対していた。この率は、看護学生（賛成79.5%・反対1.7%）と比較して、賛否ともに有意差はみられなかった。また、どちらともいえないとしながら、臓器移植に賛成した者が46.4%と半数あり、脳死を認めない者の中にも臓器移植に賛成した者が48.9%であった。これらの率は看護学生（それぞれ

53.7%、46.7%）と比較して有意差はなかった。

次に、臓器の授受についてみると、提供をすることに対しては、賛成〔自分〕55.1%・〔家族〕32.9%・反対〔自分〕18.0%・〔家族〕35.1%で

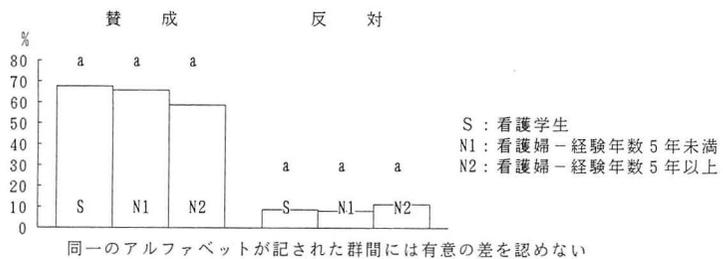


図8 脳死を死と認めるか否かの賛否 —— 一般の場合の看護婦と看護学生の比較 ——

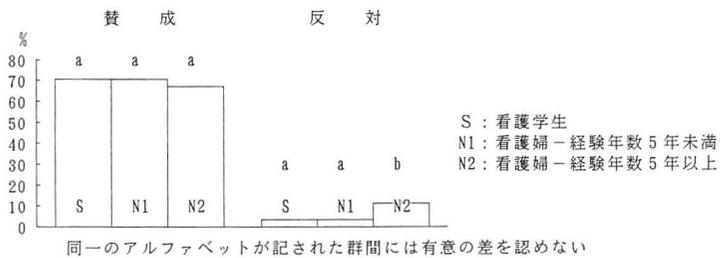


図9 臓器移植の賛否 —— 一般の場合の看護婦と看護学生の比較 ——

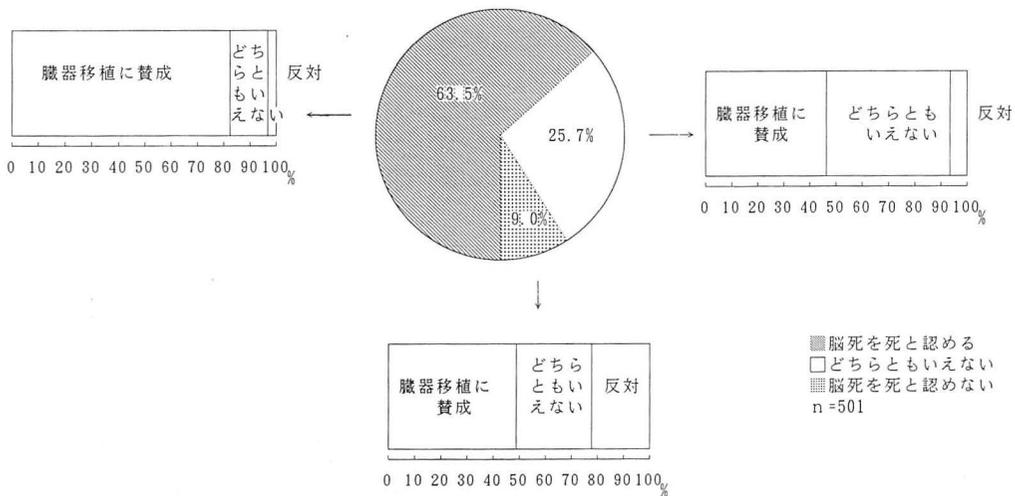


図7—② 脳死を死と認めるか否かと臓器移植の賛否の内訳 —— 一般の場合 ——

あった(図10)。この率を看護学生と比較すると(図11)、賛成は〔自分〕で、看護婦が有意に低率であった。一方、〔自分〕に賛成した55.1%の中の51.1%は、〔家族〕にも賛成したが、残りの48.9%は賛成していない。この率は、看護学生(賛成46.5%)と比較して有意差はみられなかった。

これに対して、提供を受けることに賛成は、〔自分〕37.5%・〔家族〕57.5%・反対は〔自分〕

23.6%・〔家族〕14.0%であった(図12)。この率を、看護学生と比較すると(図13)、提供を受けることに賛成する者が〔自分〕・〔家族〕の両方において、看護学生が有意に高率であった。提供を受けることに反対する者は、〔自分〕ではN2が看護学生とN1より有意に高率であり、〔家族〕ではN2が看護学生よりも有意に高率であった。

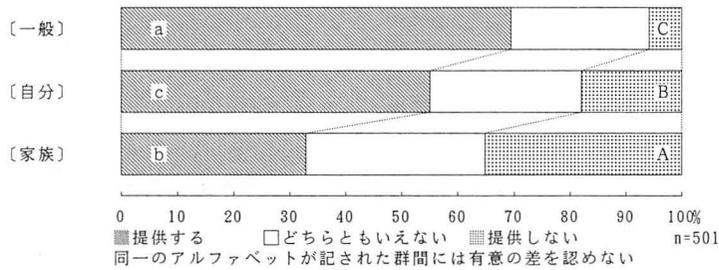


図10 臓器提供の賛否 — 一般と自分と家族に対する場合の比較 —

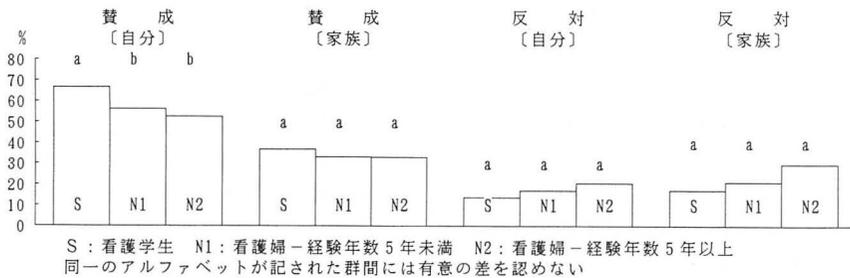


図11 臓器提供の賛否 — 看護婦と看護学生の比較 —

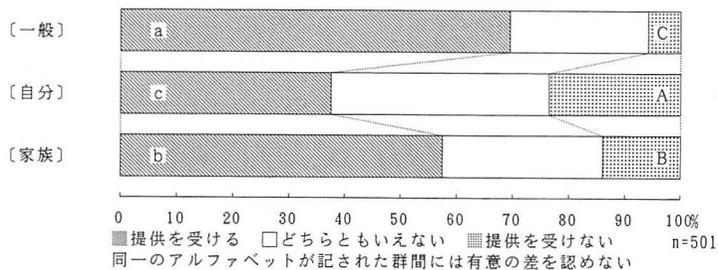


図12 臓器提供を受けることの賛否 — 一般と自分と家族に対する場合の比較 —

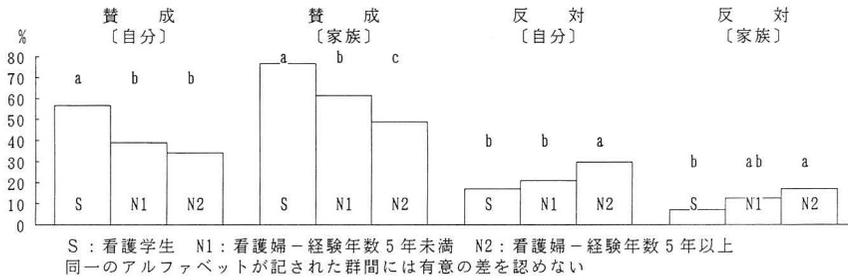


図13 臓器提供を受けることの賛否 — 看護婦と看護学生の比較 —

IV 考 察

1. 癌を告げる

患者は、最後まで回復への希望をもっている。癌告知の問題は、それを告げること、告げないことで、患者の生きることへの希望とどうかかわっていくかという点を考えなければならない。患者が、自分の人生をどのように歩んできたのかということが一つの目安となり、また、告げた場合には家族も含めて、医療者側がどれだけ終末期のケアを行いうる力と姿勢をもっているかということが重要になる。今回のアンケートの結果は、看護婦も看護学生も自分の場合には告げてほしいとしながら、一般及び家族の場合には告げること躊躇している。また、自分の場合には知りたいと答えた者のうち、家族の場合に告げると答えた者が、看護婦は17.4%にとどまり、看護学生より有意に低率であった。

川崎医科大学附属病院では、積極的告知はされていない現状にある。患者は、初期の癌で、回復できる可能性や治療が成功する可能性が高いとしても、致命的疾患であるならば、それを告げられたことで闘病意欲を失い、自棄的になることが予想される。このようなことが、看護婦の考え方に影響しているとも推察される。

また、キューブラー・ロス²⁾は、「癌と告知された患者は、否定、怒り、取り引き、抑うつ、受容というような心の動きを経過し、死に至る」と述べている。これらの否定や怒りは、日頃から信頼関係にある家族や看護婦に向かいやすい傾向にあるため、そのようなときの患者の反応に看護婦が対処できるだろうかという不安が、今回の結果を示しているのではないだろうか。

一般・家族の場合に告知することを躊躇している具体的な問題を明らかにして、解決の糸口を見つけていかなければならない。

2. 末期癌の治療

末期癌の痛みは強く、持続的である。それは、患者の一番の苦痛であり、痛みと闘うことに全エネルギーを費やして、他のことを何も考えられなくする。柏木³⁾は、「人が尊厳をもって生を全うすることができるためには、激痛の緩和が第一である」と述べている。今回の調査で看護婦は、一般・自分・家族のいずれの場合においても、苦痛の緩和を優先すると答えており、柏木と認識のしかたは同じであった。

3. 植物状態になった患者の治療・看護

人間は、人格の尊厳をもって生きている。植物状態の患者というのは、大脳半球、間脳、上部脳幹のいずれかに、または合併して障害をうけているが、呼吸・循環・代謝・体温調節などの機能をつかさどる下部脳幹の障害は免れている状態⁴⁾⁵⁾で、人工呼吸器、人工栄養補給などの生命維持の治療の進歩によって、数年あるいは十数年の生存が可能となった。

看護婦は、自分の場合、自然に任せる者が86.2%と高率であった。看護学生と比較すると、自分の場合は、同傾向を示したが、一般・家族の場合には、看護学生は治療を続けるとする者の率が高く、看護婦は自然に任せる率が高かった。看護婦は、植物状態の患者の看護に携わりながら、生命維持装置をつけて十数年生存している現実をまのあたりにして、人間が尊厳をもって生きることへの疑問を感じている。人間の気持ちとして、感情として、自然に任せる率が高くなったのではないかと考える。

4. 脳死と臓器移植

脳死と臓器移植は、先端医療が我々の生と死のはざまに投げかけた新しい問題である。欧米諸国では、脳死を「個体死（人間の死）」とする考え方が定着しており、脳死者からの臓器移植は頻繁に行われているが、日本では、未だ社会的コンセンサスが得られない状況にある。

今回の調査では、医療現場にいる看護婦は、7割が脳死を死と認めており、臓器移植に対しても同様に、肯定的反応を示す者が多かった。しかしながら、看護婦と看護学生の比較をした時に、経験年数の高い看護婦は、脳死を死と認める率が低く、臓器移植も反対する率が高かった。これは今までの看護体験が影響しているのではないかと考えられる。

V 結 論

1. 癌を告げるについて、自分の場合には告げてほしいが、一般・家族の場合には、告げることを躊躇していた。
2. 末期癌の治療では、一般・自分・家族のいずれの場合も、苦痛の緩和を第一としていた。
3. 植物状態になった患者の治療・看護について、看護婦も看護学生も自分の場合には自然に任せたいとした者が高率で、同傾向を示したが、一般・家族の場合には、看護学生は治療を続けるとする者の率が有意に高く、看護

婦は自然に任せるとする者の率が有意に高かった。

4. 脳死と臓器移植に関しては、7割近くの者が賛成していた。経験年数5年以上の看護婦は、脳死を死と認める率が他より低い傾向にあり、臓器移植に対しては、反対する率が有意に高かった。

謝 辞

本調査の実施にあたり、ご協力いただきました川崎医科大学附属病院看護婦の皆様へ感謝いたします。

文 献

- 1) 渡邊ふみ子他：看護学生の生命観に関する調査報告(第二報)、川崎医療短期大学紀要, 9, 53~59 (1989)
- 2) キューブラー・ロス(川口正吉訳)：死ぬ瞬間、読売新聞社、東京(1978)
- 3) 柏木哲夫：生と死を支える—ホスピス・ケアの実践, p. 197, 朝日新聞社、東京(1987)
- 4) 唄 孝一：医療と人権、中央法規出版株式会社、東京(1985)
- 5) 植村研一、中谷比呂樹他：人間の死と脳幹死、医学書院、東京(1984)
- 6) 黒川利雄：よくわかる脳死・臓器移植一問一答、合同出版株式会社、東京(1985)

